OBR『Sincerely ―エリカの餞―』

半沢柚々

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オリジナル・バトル・ロワイアル。西暦２０１０年１０月、東洋の全体主義国家大東亜共和国。城岩中３―Ｂプログラムからおよそ１３年後のこの世界で、また一つのクラスに死の宣告が下された。対象クラスは私立宍銀学園中等部３―Ｂの生徒４４名。ただ一人の生き残りを駆けて戦う彼らの青春ストーリー。そして、隠された二つの事件の真相が明らかになる。

▼この作品は【自サイト】、【ＰｉＰｉ，ｓ　Ｗｏｒｌｄ　投稿小説】にて多重投稿されております。

目次

生徒名簿 ―――――――― 1
Prologue ―― A and ∀ …
『A』――プログラム担当教官殺人事件 ―――――――― 6
『∀』――一家惨殺事件 ―――――――― 11
Episode1 ―― 開戦前
001.『平穏な学校生活（前）』 22
002.『平穏な学校生活（後）』 39
003.『天井の金魚』 ―――――――― 55

生徒名簿

２０１０年度戦闘実験第６８番プログラム第２６号
＊＊県私立宍銀学園中等部３年Ｂ組生徒４４名

男子

０１．秋尾　俶伸（あきお　よしのぶ）
０２．有栖川　直斗（ありすがわ　なおと）
０３．小田切　冬司（おだぎり　とうじ）
０４．金見　雄大（かなみ　ゆうだい）
０５．如月　仁（きさらぎ　じん）
０６．菫谷　昴（すみれたに　すばる）
０７．関根　春生（せきね　はるお）
０８．高津　政英（たかつ　まさひで）
０９．千景　勝平（ちかげ　しょうへい）
１０．筒井　惣子朗（つつい　そうしろう）
１１．道明寺　晶（どうみょうじ　あきら）

１２．新垣　夏季（にいがき　なつき）
１３．乃木坂　朔也（のぎざか　さくや）
１４．桧山　洋祐（ひやま　ようすけ）
１５．福地　旬（ふくち　しゅん）
１６．本堂　空太（ほんどう　くうた）
１７．御園　英吉（みその　えいきち）
１８．目黒　結翔（めぐろ　ゆいと）
１９．森下　太一（もりした　たいち）
２０．譲原　鷹之（ゆずはら　たかゆき）
２１．与町　智治（よまち　ともはる）
２２．竜崎　圭吾（りゅうざき　けいご）

女子
０１．朝比奈　深雪（あさひな　みゆき）
０２．泉沢　千恵梨（いずみさわ　ちえり）
０３．榎本　留姫（えのもと　るき）
０４．香草　塔子（かぐさ　とうこ）

０５．小日向　花菜（こひなた　かな）
０６．佐倉　小桃（さくら　こもも）
０７．白百合　美海（しらゆり　みみ）
０８．鈴茂　まなみ（すずしげ　まなみ）
０９．田無　紘那（たなし　ひろな）
１０．都丸　弥重（とまる　やえ）
１１．七瀬　和華（ななせ　のどか）
１２．野上　雛子（のがみ　ひなこ）
１３．羽村　唯央（はむら　いお）
１４．深手　珠緒（ふかで　たまお）
１５．間宮　果帆（まみや　かほ）
１６．水鳥　紗枝子（みどり　さえこ）
１７．武藤　灯里（むとう　あかり）
１８．蒲川　聖（もえかわ　まりあ）
１９．八木沼　由絵（やぎぬま　ゆえ）
２０．幸路　知佳子（ゆきじ　ちかこ）
２１．和歌野　岬（わかの　みさき）

２２．渡辺　彩音（わたなべ　あやね）
男子２２名／女子２２名／計４４名

『主要生徒』
本堂空太・・・本作の主人公。中性的な顔立ちの普通の少年。表裏のない性格で幅広い交友関係を築いているが、たまに毒舌。
佐倉小桃・・・本作のヒロイン。まずまずお茶目だが比較的控えめな印象の少女。
白百合美海・・・学年一の美少女と評判のクラスのマドンナ的存在。
間宮果帆・・・厳つい顔立ちのスレンダーな美少女。男勝りで口が悪い。
如月仁・・・三年生になり転入してきた寡黙な少年。無愛想なためあまりクラスに溶け込んでいない。
水鳥紗枝子・・・同じく三年生からの転入生。大人びた美女だが如月仁に輪をかけて一匹狼。
道明寺晶・・・ニヒルな笑顔が特徴のミステリアスな少年。クラス一の女たらし。
乃木坂朔也・・・王子様のような端麗な顔立ちをした少年。クラスの女子に絶大な人気がある。

千景勝平・・・不良少年。ストレートな物言いと毒舌で怖そうな印象がある。
泉沢千恵梨・・・女子学級委員長。女子陸上部所属。明るく快活でクラスの頼れるリーダー的存在。
菫谷昴・・・容姿端麗、頭脳明晰だが協調性がなく自分勝手で掴みどころのない少年。
榎本留姫・・・大人しく目立たない極々普通の少女。教室では読書ばかりしているが、基本的に保健室に入り浸っている。

Prologue ―― A and ∀ …

『A』――プログラム担当教官殺人事件

――プログラム担当教官殺人事件、容疑者の少年自殺。

時刻は午後五時になりました、スーパーニュースファイブの時間です。担当は私、高橋弓子がお送り致します。

えー、まずは先月発覚しました、＊＊県＊＊市で男性が滅多刺しにされ殺害された事件につきまして、新たな情報が寄せられました。

この事件は先月の七月十九日、＊＊県＊＊市内にありますマンションの一室にて、近隣の住民により「ひどい悪臭がする」との通報を受けた警察官が問題の部屋を訪れたところ、この部屋に在住する男性で、長年戦闘実験・プログラムの担当教官を勤めて参りました内角俊さん（五十一）が惨殺遺体となって発見されたもので、事件の発覚に繋がりました。

内角さんの遺体は腐敗の進行から死後一週間以上が経過してるものと思われ、部屋の各隙間から悪臭が溢れ出しており、また遺体は胸部から腹部にかけ数十ヵ所にも及ぶ刺

し傷が見受けられ、天井にまで血が飛び散るなどの悲惨な状況だった、とのこと。

これにより＊＊県警は、怨恨による殺人の可能性が高いとして、えー、以前内角さんが担当されましたクラスの最終生存者の少年が容疑に上がっておりましたが、えー、その少年がですね、内角さんを殺害した後、おおよそ二週間行方を眩ましておりましたが、今日未明、＊＊県からは遠く離れた＃＃県内の山中にて、首を吊った状態で遺体が登山客により発見されました。

はい、ではここで現地のキャスターと中継が繋がっております。田中さーん、現場はどのようなご様子ですか。

はい、現地の田中裕史です。えー、こちら＃＃県の＃＃山に来ております。えー、私の斜め右側にありますこの木ですね、えーっと非常に頑丈な、一番太い木ですね、ここで容疑者だった少年がロープで、首を吊っていたとのことだったんですね。腐敗が進行してましてですね、死後、恐らく三日前後経過しているだろうとのことです。

えー、本日午後二時過ぎですね、＃＃県警による鑑識を一通り終えまして、遺体はすでに回収しておりますが、ご覧のように、テープで周辺は被っておりまして、検証は引き続き行われるものと思われますが、少年の遺体の傍らには、えー、少年のものと思われる靴が、揃えて置かれていた、とのことでですね、鑑識の話によると少年の遺体の懐からは遺書らしきものが、えー発見されたとのことでして、自殺だろうと。

自殺ですか。えー、寄せられた情報によりますと、少年のですね、自宅、自室も非常に、綺麗だったと。整理整頓されていたと言うことなんですよね。内角さんを殺害してから、一度も帰宅をしていないと、そう言うことなんですね。

はい、自殺でほぼ間違いないだろうと。本当にね、遺体が見つかったのが奇跡だなと言うくらい、この現場ですね、木々に覆われておりまして、非常に暗いんですよ。遺書を懐にね、入れていたとしてもですね、恐らく見つからなくてもいいと、ひっそりと、ここで自ら命を絶ったものと思いますね。

そうですか。えー、前代未聞の殺人事件ですが、少年は内角さんを殺害したことを悔いて、その、命を経ったのでしょうかね。

んー、僕としてはね、悔いる気持ちがあったならば良いのにと思いますが、恐らく初めから決めていたのだろうと。少年の足取りがですね、四日前の八月三日ですね、えー、少年は暫く##山のここから、六百メートルほど離れた旅館に寝泊まりしていた、とのことなんですが、八月三日が最終的な足取りとなっておりまして、その旅館の従業員が少年と会話をしておりまして、非常に、晴れやかな表情をしていて、よく笑っていたと。笑いながら、故郷の話や友人の話などをですね、非常によく語ったと。

友人の話？

はい、子供の頃のですね、学校の話などをよく語っていたと。ただですね、その友人

たちとは何年も会っていないのだとか、もう会えないと思っていたのだと。でも、そろそろ会いにいこうかな、なんて話してたらしいんですよね。

はあ。戦闘実験で亡くなった友人を思っての発言でしょうか、非常に意味深ですね。

そうですねー。少年の話の友人がですね、戦闘実験で亡くなったクラスメイトのことなのだとしたら、そうですね、会いにいこうかな、なんて言ってるんですよね。自殺で間違いないと思いますね。

そうですね。えー、ただですね、今回の事件、少年はあくまで容疑者、とのことなんですが。警察ではどのような対応をしているのでしょうか。

はい。ほぼ間違いないだろうとの見解が強いですね。男性がですね、担当したクラスの最終生存者ですね、不審な点があるのはこの少年だけなんですね。ただし凶器の発見等にはまだ至っていませんが、そうですね、このまま、容疑者の少年死亡のまま、書類送検されるだろうと。

そうですか。田中さん、中継ありがとうございました。

はーい。

えー、スタジオに戻ります。この少年はですね、二〇〇五年度プログラムにて最終生存者となりましたが、非常に、実験中の成績は良かったと。積極的な行動が目立っていた、とのことなんですね。ただ、実験終了後の少年に身よりはなく、両親は彼の帰宅時

にはすでに他界しておりました。
また、実験の前後で人格が変わったとの情報も入っておりまして、実験後はいつも暗く大人しい性格だが時折、鋭く、睨み付けると言う人格的な問題もあって人との付き合いは、あまりなかったと。実験前はですね、非常に明るく、いつも外を駆け回っているような活発な少年だったと。剽軽な一面もあり、クラスではお調子者、友人は絶えなかった、とのことですね。
今回起こりました、非常に痛ましい、プログラム担当教官殺人事件。今回の発覚と合わせまして、えー、一九九七年に発生しました、生徒の二人が首輪を外し、担当教官と専守防衛兵士を射殺して会場から逃亡した通称沖木島脱走事件。こちらの生徒の二人はまだ捕まっておりませんが、この二つの事件により改めて、戦闘実験プログラムのあり方について再検討を行うよう、民衆の間では激しい議論が繰り広げられている、とのことです。はい。
続いての事件です。本日未明、――――――

２００７／０８／０７　ＰＭ１７：１６～

『∀』――一家惨殺事件

「約束を破ったのは、お前だ」

知らなかったわけじゃない。気付かなかったわけじゃない。それでも、好きだった。俺がお前にとって今後も必要な存在なら、正午までに時計台の下に来てほしい。約束だ――と、寂しそうに微笑んだ彼と別れたのは昨日のことのはずなのに、目の前の非日常的な光景に阻まれて、遠い遠い昔のことみたいに朧気で、希薄で、霞む。確かにそれは、同一の存在なのだけど。

どうしてこんなことになってしまったのだろう。――誰よりもあなたが好きだ、と確かにその時返事をした。偽らざる本心。だって本当に、こんなにも恋い焦がれた人は初めてだった。なのに、それすらも今は疑わしくて、彼と歩いたショッピングモールも、手を繋いだ時の温もりも、湖の畔で口付けしたことも、お気に入りのキャラクターのぬいぐるみで溢れた私の部屋で初めて身体を重ねたことも、その全てが白昼夢みたいに頭の片隅に浮かんでは消え、再び浮かんで、また消える。

けれども、不思議と意外性が見当たらないのだ。優しくて大好きだった彼も、こんな

ことをした彼も、その表情や話し方は天と地ほども違うのに、やはりどちらも彼は彼で、私はずっと以前から彼の仮面を、その裏を、ふとした時に感じてきた。感じながら、見ない、見えないふりをし続けたのだ。だからきっと、悪いのは、私。

「どうして……」

問い掛けた言葉は独り言みたいに私の周りにくぐもって、彼には届かない。

私は力強く腕にしがみつく小さな手の平を握り締めた。お姉ちゃん、と掠れた涙声は震えていて、どうしようもなくいたたまれないのに、どうすればいいのかわからない。

どすっと、嫌な音が響いた。ソファーベッドの足の狭間から見える赤塗れた腕が、なにかを探るようにもがいて、すぐに動かなくなった。すでに事切れる寸前だったその人は、それでも最後の力を振り絞って私たちのため、止めようと助けようと、必死に頑張ってくれたに違いないのに。彼はそんな父を嘲笑するかの如く、その背中を踏みつけ蹴飛ばして、包丁を突き立てた。

「やめて！　やめてよ、もうやめて！」

縋りついて泣く弟の手を振り解いて私は駆け寄った。カウンターキッチンの裏には首を切り裂かれた母が前のめりに倒れ込んでいる。リビングと繋がる和室では、布団越しに滅多刺しにされた祖母が物悲しげにこちら側を眺めていた。もっとも、その瞳は焦点がまるで定まっていない。ソファーベッドの背もたれに隠れているが、そこには兄が

横たわっている。父も、母も、祖母も、兄も、つい数分前、この男に殺されたのだ。

「あなたが好きだった」

つい、数分前までは。

「あなたは私が好き？　私と一緒にいたい？　私を殺したい？」

多分、本気になれたと言う意味で、初恋だった。

両親を殺してきた。――彼がそう告白してきたのは一昨日のことだった。

元々は職人だったと言う彼の父親は、不慮の事故をきっかけに手の神経を失い、以後職にも就かず酒に溺れる日々を過ごしていたと言う。朝も夜も働き詰めだったと言う母親は、なにかに理由を付けて家を空けることが多かった。飲んだくれの父親が家事手伝いなどするはずもなく、幼く非力な彼はいつも餓えに苦しんでいた。やがて母親が何日も帰宅しないと言うことが続き、浮気を疑った父親は、母親に対して暴力を振るうようになる。物心付いた頃から彼の目に映る母親は、いつも身体に青あざを作っていた。幼い彼を残し母親は何度も愛人と逃げようと試みるが、その度父親の妨害を受け、悪循環にも暴力は益々にエスカレートしていった。しかし離婚など父親が許すはずもな

かったし、母親も母親で、雁字搦めにされた束縛から逃れる希望を閉ざしてしまう。行き場のない母親の鬱憤はいつしか実の息子である彼に向けられるようになる。驚いたことに彼は、一度も、母親の笑顔を見たことがないと言う。

どこかで聞いたような、絵に描いたような、崩壊した家庭。不幸の代名詞のような彼。それでも彼は、いつも笑ってた。私がその事情を知る前も、知った後も。

中学を卒業したら、妹を連れて家を出るんだ。働きながら俺が妹を育てるんだ――その決意を聞いたのは僅か半年ほど前だった。彼は言った。我慢するのは今だけだと、けれどここまで我慢した自分は誰よりも頑丈だと、強いと。どんな困難もきっと困難ですらない、意志の強さは誰にも負けない、両親のように破綻した人格に育てられた自分がまともな人間だとはとても言えないけれど、誰よりも人の痛みが分かる人間でありたい。自分を見て、両親の育て方が悪いからだなんて言われたくない。人に褒められるような、すげえいいやつでいたいんだ、と。

卒業式は僅か一ヶ月先だった。もう少しで長年の苦境から解放されるはずだった。なのに、なのに、何故。

――両親を殺してきた。あいつら、薄汚ねえ変態共に妹を売ってやがった。妹を売った金で薬なんてやってやがったんだ。少し前からヤクザみたいなのが取り立てにきてた。妹売って、薬やって、借金までしてやがった。あいつらが生きてたら駄目なんだ。

俺たち兄妹、ずっとあいつらに苦しめられるんだ。だから、殺した。

やがる、だなんて、彼のこんな乱れた口調は初めてだった。けれど言葉とは裏腹に彼は冷静で、その瞳は偉大ななにかを決意したように揺るがなかった。そんな彼に末恐ろしさを感じなかったわけではないけれど、私は、彼に対する同情を禁じ得なかった。逃れる道が殺人しかなかっただなんて、なんて悲しくやりきれないのだろう。実の両親を殺した罪の大きさもなにもかも、私と同い年のまだ十五の少年が、まだまだ成長しきれてないその背中にたくさんたくさん、いくつも背負って、けれど嘆かず涙も見せず、どうして、何故、神様は彼にこんな試練ばかりを与え、苦しめるの。どうして、何故、そんなにも強くいられるの。

もう苦しまないで、と、私は彼を抱きしめた。そして、こうも。——私にできることなら、なんでも力を貸すから、と。

——ツテができたんだ。妹を連れて、遠くに逃げようと思う。名前も変えて、新しく人生をやり直すんだ。俺、精一杯働く。働いて働いて、妹を養う。なあ、お前も、俺と来てくれないか？

それは、昨日のことだ。言葉を失う私を、彼は穏やかに微笑して抱き締めた。

——好きだ。どうしようもなく好きだ。俺にはお前が必要なんだ。なあ、大切にするから、俺に力を貸してほしい。

――私も、誰よりもあなたが、好きよ。
――俺がお前にとって今後も必要な存在なら、正午までに時計台の下にきてほしい。誰よりも大切にするから。約束だ。
――誰よりも、あなたが、好きよ……。

「どうして来なかった?」
私を殺したいか、その問い掛けに彼は答えなかった。彼の手の中で、私の家族を奪った包丁が赤黒く、不気味に光っている。
お姉ちゃん――もう一度、弟の声がする。私は彼に、また一歩近づいてその顔を見つめる。いつも優しく穏やかだった彼の面影はまるで幻のように、返り血で染まった表情の奥は果てしない憎悪が広まっている。きっとこれが、彼の本質だったのだ。幼少期から叩き込まれた苦痛、憎悪、それを押し殺して自分を偽って生きてきた。けれどそんな自分を認めたくなかっただろう。だから必死でいい人でいたかった、まともな道を歩きたかった、きっと、両親を殺害した時に、我慢が死んだのだ。
可哀想な彼。けれども、彼は、この男は、私の、大切な家族を――。
「行くだなんて、言ってないじゃない!」

お姉ちゃん、と弟が後ろで叫んだ。

＊　＊　＊

お父さんとお兄ちゃんがソファーでテレビをみていました。
お母さんはキッチンであらいものをしていました。
おばあちゃんはとなりの部屋でねていました。
お姉ちゃんとぼくはごはんを食べるテーブルでカードゲームをしてあそんでいました。
いきなりぼくの知らないおとこのひとが入ってきました。お父さんがおとこのひとのそばに行っていいました。
「＊＊＊くんじゃないか、勝手に入って、いったいどう」
お父さんがいいおわる前にお父さんは血をながしてたおれました。
お姉ちゃんがキャーとさけびました。それからはあっという間でした。
次に刺されたのはお兄ちゃんでした。おとこのひとがソファーにお兄ちゃんをおしたおして体中を刺しました。お母さんとお姉ちゃんといっしょにぼくもさけびました。

おとこのひとはにげるお母さんをキッチンで刺しました。となりの部屋にいるおばあちゃんも刺されました。

おとこのひとはぼくとお姉ちゃんを見ました。赤くてとてもとても怖い顔でした。ぼくも刺されるとおもって怖くて、お姉ちゃんにしがみつきました。おとこのひとがまたお父さんを刺しました。

お姉ちゃんがさけびながらぼくをふりほどいて、おとこのひとのところにいきました。ぼくはお姉ちゃんを呼びました。でもお姉ちゃんとおとこのひとぐちゃぐちゃにもみ合ってぼくのことをわすれていました。

おとこのひとがお姉ちゃんの上にのってお姉ちゃんをいっぱい刺しました。お姉ちゃんは目をあけたままうごかなくなりました。おとこのひとが死んだお姉ちゃんにキスをしました。ぼくは怖くて怖くて泣きじゃくっていました。

おとこのひとがぼくの方にあるいてきました。ぼくはいよいよ刺されるとおもって怖くていっしょうけんめいお願いしました。

「いやだ、たすけて、たすけて、こわい、ころさないで、刺さないで」

おとこのひとが赤い手でぼくのあたまをなでました。

「坊主、死にたくないか?」

ぼくはうんうんとうなずきました。

「そうか。でもな、兄ちゃんはお前を殺そうと思ってないけど、お前は、兄ちゃんより怖い人たちにこれから殺されちゃうんだよ」

意味がわからなくてぼくはなにもいえませんでした。

「兄ちゃんな、これから坊主の姉ちゃんと同じところにいくために死のうと思うんだよ。そしたらな、誰が姉ちゃんたちを殺したんだってことになっちゃうんだよ、わかるか?」

ぼくは首をふりました。

「これからな、お巡りさんがくるんだけどな、坊主だけが生きてると、坊主が殺したんだろってことになっちまうんだよ。そしたらな、坊主はお巡りさんとか色々な怖い人に、いっぱい痛いことされて殺されちゃうんだよ、わかるか?」

よくわからなかったけど、いっぱい痛いことされて殺されるのだけはわかりました。ぼくはうんとうなずきました。

「坊主、死にたくないか?」

ぼくは何回も何回も大きくうなずきました。おとこのひとがまたぼくのあたまをなでて笑いました。

「わかった。そうしたらな、坊主、上で新しい服に着替えてこい。コートはあるか? できれば、フードがついてるやつがいい。それを着たら、フードを被って、このバックを――」

そういっておとこのひとは黒いバックをぼくに持たせました。すこしおもいバックでした。

「これを持って、町の時計台の下にいけ。時計台、わかるか？」

ぼくはうんとうなずきました。

「そうか。一人で行けるよな？」

ぼくはうんとうなずきました。

「いい子だな。時計台の下に着いたら、しばらくそのまま待ってろ。坊主がいい子にしてたら、おっかない顔したおっさんが声をかけてくる。ああ、バックはちゃんと肩にかけて、見えるようにしとけよ。おっさんは一見怖い顔をしてるけど、坊主を助けてくれるからな。おっさんの言うことをちゃんと聞けよ、わかったな？」

ぼくはうんとうなずきました。

おとこのひとがきがえてこいというので、ぼくは二階の部屋でおとこのひとがいったようなぼうし付きのコートにきがえて下におりました。

「お兄ちゃん……？」

おとこのひとはお姉ちゃんの上にたおれていました。血をながして死んでいました。

ぼくは泣きながら必死におうちをでました。泣きながらいっしょうけんめい走りました。

2000／06／12

PM20：37〜

Ｅｐｉｓｏｄｅ１　――　開戦前

００１.『平穏な学校生活（前）』

鉄筋コンクリートの壁に囲まれた活気に溢れる教室中に、ぱちぱちと手の平を小気味良く打つ音が響く。

「みんな、席に着いて～！　注目～！」

てんでばらばらにお喋りを繰り広げていた生徒たちは、ある者はしゃきっと、ある者はかったるそうに、ある者は慌てて自分の指定席に着席し、教卓と黒板の間で晴れやかに微笑む女子学級委員長に注目する。

教卓の真横で分厚く束ねられた資料を数えていた男子学級委員長は、窓際から順に足を運び最前列の生徒に五、六冊ほどの束を直接手渡していく。

佐倉（さくら）　小桃（こもも）（＊＊県埼玉（さいたま）三川市（みかわし）私立宍銀学園（ししがねがくえん）中等部三年Ｂ組女子六番）は手元に配られて来た修学旅行の資料を捲った。

沖縄の旅・三泊四日の修学旅行――中学生にしては、随分と豪華な旅行だ、と小桃は思う。見渡す限り青い海の見える宿泊ホテル、輝くような浜辺、沖縄料理。もちろん観光スポットだって有名なものばかり。美ら海水族館、首里城公園、宮古島、琉球斑、ひ

めゆりの党、それに沖縄と言えばさとうきび畑――先の大戦で米帝と唯一の地上戦が行われた地と言うことで（今日における大東亜共和国の歴史書（旧日本史）を簡潔に参照すると、血迷った米帝による自滅行為であり旧日本軍の完全たる圧勝に終わった戦い）、年頃の女子としてはいささか不似合いだが、そのどれもが小桃には興味をそそるものだった。

修学旅行は沖縄がいいな、それは小桃が宍銀中に入学して以来、幾度となく口にしてきた台詞だ。宍銀中の修学旅行は、恒例と呼ばれるものがあまりなかった。今回の沖縄の旅も、聞けば五年ぶりと言う。自分たちの代でまさか念願の沖縄に行けるだなんて――小桃は恐らくこのクラスの誰よりも今回の旅行を楽しみにしていた。

女子学級委員長の泉沢（いずみさわ）千恵梨（ちえり）（女子二番）が教卓に両手を添えながら、旅行の資料が全員に行き渡るのをぐるりと見渡して確認する。

その後ろでは、男子学級委員長の筒井（つつい）惣子朗（そうしろう）（男子十番）が黒板に、【沖縄の旅・学習班及び部屋決め】と、書き記していた。もちろんこれだって修学旅行の醍醐味の一つだ、ましてや三泊四日ともなれば。小桃は黒板前に立つ委員長二人を静かに見据えた。

「みんな、どっちから決めたい？」

「はーい、委員長、部屋決めがいいでーす」

悠長な口調でそう言って手を上げたのは、多分このクラスで一番発言率が高い男――

もっともそのほとんどが普段はただの茶々入れなのだが――道明寺（どうみょうじ）　晶（あきら）（男子十一番）だ。紺色のブレザー制服を緩く着崩しているのがむしろお洒落でスタイリッシュな印象の彼は、満面の笑みを千恵梨と惣子朗に向ける。

晶の右隣の席で、野球部の四番バッターで爽やかな坊主頭の竜崎（りゅうざき）　圭吾（けいご）（男子二十二番）が同調するように頷く。

「部屋なんてほぼ決まってるようなもんだろー、自由でいいんだよな？」

「そうね」

千恵梨が緩く編み込まれたふんわりした印象のおさげ髪を揺らして微笑む。

「でも、次の学習班決めはくじ引きだからね」

「えー！　くじとかやだー、全部自由でいいじゃなーい！」

サラサラとしたストレートのセミロングを揺らしながら立ち上がって抗議したのは渡辺（わたなべ）　彩音（あやね）（女子二十二番）だ。女子用の茶色いブレザー制服は椅子の背もたれに掛けられ、グレーのカーディガンを腰に巻き付けこちらもやはりお洒落な感じに着崩している。今時イケてる学生服の着こなし方よ、なんて台詞を彼女の口から聞かされたクラスメイトは数知れず――確かにこのクラスは制服の着こなし方にやや問題がある生徒が多かった。何度か指導対象になったことがあるくらいだ。

まあ、私立中学の割に規則が緩いと地元でも話題の学校なので、その程度のことでは

改善は当然されなかったのだが。

「渡辺さんの言う通り全部自由でもいいんだけど。でも、せっかくの思い出作りなんだから、たまにはあまり話したことがないクラスメイトとも交友できたら、最高じゃない？」

可愛らしく人差し指を立てながら、千恵梨が相変わらずの華やかな微笑を浮かべ提案する。衣替えに際しておろした染み一つない茶色のブレザーに、清潔な赤いチェックのスカート、長は膝上五センチくらい。

千恵梨はあまり制服を着崩さない生徒だったが、華やかな彼女はきっちりと着こなしたこのスタイルがとてもよく似合っている。

「はーい、あたしは委員長にさーんせい！」

次に声を上げたのは白百合（しらゆり）　美海（みみ）（女子七番）だった。色素の薄い艶やかな腰まで届く長髪が特徴的な、クラスで一番可愛いと評判の美少女である。ふわりと緩めに波打つ柔らかい長髪は女の誰の目から見ても見事、としか言いようがない。

美海はにこにことアイドル顔負けの可愛い顔で笑いながら、彩音に振り向いて小首を傾けた。

「その方がきっと楽しいよ、アヤちゃん」

「んー、美海ちゃんがそう言うなら、まあいいけどー」

彩音は仕方なしに唇を尖らせたが、なんやかんや美海に笑顔で答える。美海が千恵梨に向き直って茶目っ気たっぷりにウィンクすると、千恵梨は嬉しそうに頬を綻ばせ頷いてみせる。

「オッケー、反対意見はもうない？　なら班決めはくじで決定だからね！」

「いいから早く部屋きめようぜー」

剣道部所属の金髪の少年（ほぼ幽霊部員だ。高等部に上がってもどうせ続けないのだから早く引退してやれと、まことしやかに囁かれている）、目黒（めぐろ）　結翔（ゆいと）（男子十八番）がかかったるそうに言う。派手な金髪のせいで一見怖そうに見えるが、その顔は少年らしく童顔で色白だ。とろりとあどけなく、結翔の瞼が眩しそうに細められた。

「俺さあ、もう眠くてしょうがないんだよね。早く終わらせて少し寝かせてくれー」

「こらこら、授業中だっつーのに」

惣子朗が苦笑し困ったように頭を掻く。そもそも、全く話が進んでいないのだ。

「じゃあ部屋決めるぞ。えーっと、男子も女子も部屋の数は同じで、十人部屋が一つと、六人部屋が二つな」

「えー、お部屋、三つしかないのー!?」

「みんなの部屋荒らし回ろうと思ってたのにいー！」

今度は天然ボケでムードメーカーの香草（かぐさ）　塔子（とうこ）（女子四番）と、女子代表お調子者で

トラブルメーカーの幸路（ゆきじ）知佳子（ちかこ）（女子二十番）のコンビだった。千恵梨と同じグループのメンバーと言うこともあってか、千恵梨は仁王立ちになり、ぷりっと膨れ少し怒ったふりをしてみせる。

「三部屋のなにが不満なのよー？　言っとくけど、あたしたちは問答無用で大部屋だからね。わかった？」

「おお、じゃあ夜は枕投げね！　十人で枕投げなんて燃えるわー！」

柔道部に所属する知佳子は力勝負はなにかと血が騒ぐのか、ガッツポーズを作り豪快に笑う。塔子が「よっ、ナンバーワン！」と茶々入れるのを見て、クラス中から笑いが起こる。

「じゃ、泉沢たちは大部屋でいいんだな？」

「ええ、ありがとう、筒井くん」

惣子朗が確認を取りながら、黒板に名前を書き連ねていく。

【女子大部屋：泉沢、香草、佐倉、田無、七瀬、羽村、深手、武藤、幸路】

「一人足りないな」

「あ、じゃあ、誰か私たちのグループに入ってくれる人いるー？」

千恵梨が両手でメガホンを作るようにして声を掛けると、「あ、はーい」と言って手をあげようとしたのは白百合美海だ。

「バカこら、美海はダメに決まってるだろ！」

慌てて美海を制したのは間宮（まみや）　果帆（かほ）（女子十五番）だった。ぎっしりと漆黒の睫毛が詰まった勝ち気な猫目を吊り上げ、やや癖っ毛の黒いショートヘアが跳ねる。勢いに任せ椅子から立ち上がると　、スレンダーな身体をやや前のめりに倒して前の席の美海の頭を小突いた。

「いたっ、果帆～？」

「あんたはあたしらと同じ部屋だっつーの」

「そうそう、美海、裏切っちゃダメよ」

美海から二つ斜め前の席で、黒いベストの華奢な背中がくすりと微笑んで振り返る。彼女は和歌野（わかの）　岬（みさき）（女子二十一番）――仲間内ではサキとの愛称で親しまれる彼女は、雪のように色白で儚げな可憐な美少女であった。黒檀の木のような真っ直ぐの黒髪を指で撫で、淑やかに微笑む岬に美海は少したじろいだ。

「う……、でもサキちゃん、どっちにしたってあたしたちも一人分空いちゃうよー？」

「まあ、確かにね」

岬は軽く相槌を入れてすぐに顔を前へ戻してしまう。その、右から二つ隣の席で、岬

と特に親しい小日向（こひなた）花菜（かな）（女子五番）がおかしそうに微笑した。
美海は困ったように果帆を見詰める。
「いや、あたしに目で訴えられても……」
「あ！」美海は今度はするりと左後ろを振り返った。
「紗枝子ちゃん、一緒にどうかな？」
「え……」
いきなり話を振られて水鳥（みどり）紗枝子（さえこ）（女子十六番）は一瞬面食らったような表情をする。基本的に一匹狼でクールな彼女にしては珍しい反応。
紗枝子はこの春に宍銀中に編入して来たばかりのクラスメイトだった。彫りが深くはっきりとした顔だちで、とても同じ中学生とは思えないような大人びた雰囲気を持っていた。そのため、なんとなくクラスにはまだあまり馴染めていない印象である。もっとも、彼女自身、積極的に交友するタイプではないのだが。
美海が可愛らしく小首を傾げながら紗枝子に微笑むと、紗枝子はじっくりと（なにを考えているのか読めない表情で）その顔を見詰めて、ややして、唇の端を持ち上げながらふっと息を吐いた。
「白百合さんたちがいいなら、お願いしようかしら」
「やったー、決まり！」

美海が嬉しそうに手を叩く。ピンク色のカーディガンの周辺を、美海のふわふわとカールした長髪が動きに合わせて跳ねる。
「委員長ー！　あたしたち決まりましたー！」
「了解～」
千恵梨と惣子朗が頷いて、黒板に新しく名前を書き足していく。

【小部屋①：小日向、白百合、間宮、水鳥、八木沼、和歌野】

「女子はほぼ決まりだな」
「そうねー。萠川さんや朝比奈さんたちは、どうする？　どちらかが妥協しなくちゃいけないけど……」
「えー、アヤ、絶対マリアたちと一緒がいいー」
オレンジのグロスが塗られた唇を尖らして、またしても不満声を上げたのは渡辺彩音である。
「ねえヒナ、マナ、同じがいいよねー？」
「えー、そりゃ、うん！　もちろんだけどー！」
急に話を振られた野上（のがみ）　雛子（ひなこ）（女子十二番）が、こちらも色素の薄いツインテールを

上下に揺らして大きく頷く。もう一人の鈴茂（すずしげ）まなみ（女子八番）は、ガーリーなタイプの短髪を軽く上下に揺すったのみで、特に返事もせず頬杖をついている。

「渡辺ー、お前さっきからうるせーぞー！」

そうガヤを飛ばすのは福地（ふくち）旬（しゅん）（男子十五番）だった。線が細く男性にしては小柄、彼も色白で一見整った顔立ちをしているが、小さめの鼻と薄めの下唇には銀色のピアスが煌めいている。そろそろ眉毛にも開けようと思うんだよな、と口にしたのはこの時間が始まる前の休憩時間のことである。

彩音は旬に抗議の視線を向けたが結局はなにも言わず、すぐに蔵川（もえかわ）聖（まりあ）（女子十八番）の顔を伺う。彩音の後方の席で携帯電話を弄りながら足を組んでいた聖は、その視線には答えず、無愛想に発言した。

「あたし、別に委員長たちと同じ部屋でもいいけどー？」

「本当!?」

千恵梨の表情が嬉しそうに輝く。

「うん。だって、朝比奈さんたちのグループ離すの、なんか可哀想だからさー」

「えーやだよー、アヤ、マリアも一緒がいいー」

聖がはあっとため息を吐いて面倒臭そうに彩音に視線を向ける。

「ワガママ言うなっつーの、委員長困ってんぢゃん？」

「あ、あたしたちは別に大丈夫よ」
　千恵梨が困った顔に愛想笑いを張り付けると、それが少し気に入らなかったのか聖は僅かに顔を顰め、押し黙ってしまう。百七十センチもあろうかと言う長身と、インクのような真っ黒のアイラインでクールに整ったつり上がる目尻。あまり騒がないタイプなだけに、中々の迫力である。
「ねえ、やっぱりあたし委員長たちの部屋いこうかー？　そしたらマリアちゃんたち、二組に分かれられるでしょー？」
「大丈夫だっつーの、美海はもう決まってんだから、気にしなくていいのー」
　困った人は放っておけない気質の美海がまたしても提案するが、聖はそれを不機嫌そうに頑固拒否する。バーカと、美海の後ろで果帆がやはり彼女を小突く。
「じゃ、じゃあ、萠川さんは大部屋でいいのかしら？」
「うん、いいよー」
「ちょっと待って」
　聖が答えるや否や、今まで沈黙を貫いていた問題のもう一つのグループのメンバー、榎本留姫（えのもるき）（女子三番）が間に入ってくる。ポニーテールに結った黒髪の毛先が、柔らかくうなじの辺りに纏わりついている。留姫は落ち着きを払った口調で、淡泊に続けた。

「逆に申し訳なくなっちゃって。私、大部屋に行きたいなって思うわ」
「はあ？　別に榎本さんたち三人は固まってればいいと思うけどー」
「別に、一緒の部屋にしようね、なんて話は特にしていなかったし。それに私、一応風紀委員だから、寝る時以外あまり部屋にはいれないと思うの、だから」
　それは聖の意地っ張りな妥協（としか見えなかった）より、余程筋が通っているように思えた。千恵梨の表情が軟らかくなって、聖と留姫を交互に見比べた後、留姫を見据えた。
「榎本さん、お願いしてもいいかしら、歓迎するわ」
「ええ、よろしくね」
　そのやりとりを見届けた聖が、降参したと言うようにふっと不適に笑んで、異論はないと言うように無言で手を振るう。これにより女子の部屋の割り当ては以下で落ち着くこととなった。

【大部屋：泉沢、榎本、香草、佐倉、田無、七瀬、羽村、深手、武藤、幸路】
【小部屋①：小日向、白百合、間宮、水鳥、八木沼、和歌野】
【小部屋②：朝比奈、鈴茂、都丸、野上、萠川、渡辺】

＊　＊　＊

「それじゃあ次、男子決めるぞー」
筒井惣子朗がチョークを持ち直して黒板に向き直る。その傍らでは泉沢千恵梨が今し方取り決めとなった女子の部屋の割り当てのメモを教卓で書き写している。
「俺もうマジで眠い！　寝かせろー！」
「授業中だバカ、少し我慢しろ！」
膨れっ面で音を上げる目黒結翔を叱咤しつつ、惣子朗の頭の中では部屋当てのおおよその図形は完成していた。と言っても、女子ほどグループの構造は複雑ではないので、各種グループで割り当ててしまえば自然とこの形に収まってしまうのだが。
「なあ筒井、とりあえずグループ毎に書き出して適当にまとめちゃえばいいんじゃねえか？」
そうして声を上げたのは乃木坂（のぎざか）朔也（さくや）（男子十三番）だった。クラスの女子に一番人気があると言う、人当たりの良さそうな笑顔を浮かべて続けた。
「なんなら筒井が勝手に決めちゃっても、誰も文句言わないと思うけどな」
「まあ、それでいいなら俺決めてもいいけど……」

「はいはい、筒井くん！　俺らは小部屋な！」

福地旬である。顔にも耳にもピアスを散りばめた、どちらかと言えば問題児の部類に入る旬の周囲には、やはり同じ部類とも言うべき少し不健全な面々がグループを形成している。

秋尾（あきお）　俶伸（よしのぶ）（男子一番）、高津（たかつ）　政秀（まさひで）（男子八番）、千景（ちかげ）　勝平（しょうへい）（男子九番）、御園（みその）　英吉（えいきち）（男子十七番）、譲原（ゆずはら）　鷹之（たかゆき）（男子二十番）の計六名である。丁度小部屋の人数である、なんの問題もない。

「ああ、福地たちはそれで――」

「いやいや、福地くーん、君たちは大部屋にしてよー」

話を遮ったのは道明寺晶だ。なにかと曲者の口達者、恐ろしく頭が切れるのと女性関係で破天荒な噂の絶えない彼は、クラスの女子にはやや敬遠されているが、整った顔立ちとミステリアスな雰囲気は一見異性には魅力的らしく、先輩・後輩問わずにやたらとモテている男である。

「えー、なんでだよ道明寺ー？」

「いやー、俺らもまぜてくれるとすげえ有り難かったりしちゃって？」

「なんだよそれー」

晶はケラケラと笑いながら、両手を鼻の前でこすり合わせ、頼み込むポーズを取って

いる。
「あー、アキラ、またなにか悪いこと考えてるんでしょー？」
白百合美海が悪戯っ子のようなチャーミングな笑顔を浮かべて、晶に耳打ちする。とんでもない、と晶は大袈裟に手を振ってみせる。
「美海、憶測でものを言っちゃいけないよ？」
「あはは、あとでこっそり教えてね」
人差し指を唇に当てて、美海が小悪魔のように微笑む。後ろの間宮果帆も意味ありげに晶に目配せしている。
「おいおい、お前ら、男の問題に女が首を突っ込んじゃいけねえんだぜ？」
どんな問題だそれは――惣子朗は心の中でこっそりとツッコミを入れる。多感な時期の健康児としては、男の問題、と言う単語になんとなく心惹かれないわけではないのが、なんとも歯痒い。
「なあ御園、どうするー？」
旬も似たようなことを感じているらしく、グループのまとめ役のような存在になっている御園英吉に答えを求めている。
「俺は別に構わない」
大して興味もなさげに英吉が答えると他のメンバーも頷き、口々に言うのだった。

「いいぜー道明寺、歓迎するよ」
「よろしくなー」
「おう、サンキュー。朔也や直斗も構わねえだろ？」
「ああ、問題ないぜ、よろしくなー」
有栖川（ありすがわ） 直斗（なおと）（男子二番）が晶に親指と人差し指で輪を作りサインを送ると、晶は満足げに頷いた。
「ってことで筒井くん、大部屋でよろしくー」
「……一人分空くのは」
「ああ、それは」と言ったのは乃木坂朔也だった。
「なあ如月、お前入るだろ？」
如月（きさらぎ） 仁（じん）（男子五番）は、水鳥紗枝子と同じく今年の春に編入してきたばかりの生徒だ。
　こちらも紗枝子と同じようにクラスに馴染むのが不得意な様子で一匹狼でいることが多く、またあまり表情を変えず仏頂面でいるため、なんとなく近寄りがたい雰囲気を醸し出していた。だが、乃木坂朔也等一部の生徒とはそれなりに会話することも多いらしく、完全な一匹狼でもないので惣子朗もあまり心配せずにいるのだが。
「ああ、そうだな。俺はそこでいい」

仁が頷いたことで、男子の部屋決めは必然的にこのような結果を作ることになる。

【大部屋：秋尾、有栖川、如月、高津、千景、道明寺、乃木坂、福地、御園、譲原】
【小部屋①：金見、菫谷、関根、新垣、本堂、森下】
【小部屋②：小田切、筒井、桧山、目黒、与町、竜崎】

２０１３／１０／０６　ＰＭ１４：０６～

００２．『平穏な学校生活（後）』

「俺ら六人グループでよかったな、あっさり決まったし」
本堂（ほんどう）　空太（くうた）（男子十六番）はそう言いながら、旅行の資料を捲り、斜め前の席から喋りやすいように身体を横に向けている新垣（にいがき）　夏季（なつき）（男子十二番）に、のほほんと笑い掛けた。
「まあな。でも、大部屋楽しそうで、俺は羨ましいぜ」
「確かにー。どうせなら男子全員入れる部屋、用意してくれればいいのになー」
「バーカ、そんな部屋さすがにあるわけないだろー？」
二人で笑い合って、手元の資料の空欄に取り決められた各部屋の構成を書き込んでいく。なんにせよ、不満はない。基本的に宍銀中三年Ｂ組の男子生徒は、異なる性質がはっきりと現れたグループが何種か存在してはいるものの、グループとは名ばかりの大まかな振り当てであって、基本的に皆、仲が良かった。特に空太や夏季と言った極々ノーマルな男子生徒の集まり――差し当たり、男子中間派とも呼ぶべき面々の彼らは交友関係が幅広く、クラスによく馴染んでいた。学校生活においてやや問題点の多い所

謂、不良と呼ばれる御園英吉率いるグループの面々すらそれは例外ではなく、空太の通路を挟んで右側の席の千景勝平が空太たちにこう声を掛けるのも、極自然なことであった。

「お前らも遊びに来いよ。道明寺の野郎がなにを企んでんのかは知らねえが、退屈はさせないぜー？」

「おう、行く行く、絶対行く！」

そんなやり取りを聞いていた同じく不良の譲原鷹之が、物珍しそうに会話に割り込んでくる。

「まったく色気の欠片もない野郎共だなー、ここはまず、女子と部屋を離されたことを嘆くべきじゃね？」

「なに言ってんだ、お前……」

勝平がそのあまりの馬鹿馬鹿しさに、呆れたように口をぽかんと広げながら鷹之をじっとりと睨む。

「どうせ俺らはまだ子供なんだし、男女混合でも問題ないと思わねえ？　これって所謂、男女差別、ってやつでしょ」

「いや、そいつあ絶対に違うだろ……」

鷹之の発言を聞いていた夏季が、同じく呆れたように力なく笑う。

「譲原みたいなのがいるから混合にしちゃマズイんでしょ?」
「おお、よく言った!」
相変わらず気の抜けたような柔らかい笑顔でちゃっかりと毒舌を吐く空太の頭を、勝平が愉快そうに鷲掴んで乱暴に撫で回した。
「いって、やめろよー」
「あはははは!」

「はーいじゃあ、今度は学習班決めね」
女子学級委員長の泉沢千恵梨がにんまりと微笑みながら、再び注目を黒板に集める。千恵梨の後ろで黒板の文字を消していた男子学級委員長の筒井惣子朗が、綺麗にしたばかりのその深緑の板に、新しく【学習班決め】と白いチョークを走らせていた。男女混合・四人組の班が全部で十一組できるのだと言う。
「ねえねえ委員長、ていあーん!」
幼女のように甘く澄み透った耳心地よい声で、八木沼(やぎぬま)由絵(ゆえ)(女子十九番)が無邪気に手を上げる。もっとも彼女の喋り方は緩慢でおっとりとしていて、滑舌があまり宜しくない。その平べったい話し方は耳には入りやすいのだが、聞き取りやすいとはとても言えない産物であった。

「くじ引きはくじ引きでもー、ペアでー、くじ引きがしたいでーす」
「ペアでくじ引き?」
謎々のような物言いに千恵梨は不思議そうに小首を傾げる。
「要するにー、最初に好きな人とペアを作ってー、でー、くじ引きで組合せればいいと思いまーす」
「なるほど……」
少し釣り上がり気味の目を丸くして千恵梨が意外そうに頷く。ぽわーんと常に微睡んでいるようなイメージのある由絵にしては、割かし真っ当な提案である。
「いいんじゃないか。八木沼の言うのが一番不満が出ないだろ」
千恵梨の傍らで惣子朗が小声で言うと、少し考えるような仕草をしてから、千恵梨も頷いた。
「ま、いっか。じゃあ、男女別れてそれぞれ二人組に――」
「だってさー、勝平ー、委員長のお許しが出たよー」
千恵梨の説明を遮り、途端に由絵が後ろ側を振り向いて、距離があるのも構わず勝平に満面に笑いかける。突然のことに焦った勝平が僅か頬を赤面させ、やや上擦った声で早口に捲し立てる。
「バカ、お前こんなの聞いてねえぞ!」

「えー、だってー、一緒に行動しようって約束してたじゃなーい」
「そ、そう、だけど……ここで言うなって……」
少し離れた席で白百合美海と間宮果帆が、にやにやと悪戯な笑顔で勝平を見ている。
もっとも、意地の悪い笑みを浮かべているのはこの二人だけではないのだが。
「八木沼さん、男女でペアを作られちゃうと、少し困ったことになるんだけど」
「どうしてー？　だって男女混合なんでしょー？　いいじゃなーい」
「そ、そうだけど、なんていうか……」
「あたし、勝平とずっと前から約束してたんだもん」
困り果てた千恵梨の横で、惣子朗がまあまあと宥めるように二人の間に割り入る。
「もう一組男女ペア作ってもらえば問題ないだろ？」
「ちょっと、それでいいの？」
目尻を少しだけ険しく釣り上げ、怒ったような仕草で千恵梨は腕組みをし惣子朗に向き直った。
「だいたい千景くんだって、いいとは言ってないわよ？」
「いや、あいつは……」
罰が悪そうに赤面し、珍しくしおらしい態度で俯いている勝平に惣子朗は確認を促す。

「勝平、どうするんだ？」
「ま、まあ、約束はしてたし、その、な」
「はいはい」
　とてもとてもお熱いようです――無言で首を振る惣子朗を見やって、千恵梨は諦めたように脱力し息を吐いた。公然の場でこの様子なのだから、なにを言っても無駄なのであろう、そうなのであろう。
「わかったわかった、特別に許可します。じゃあ、男女ペアをもう一組作るけど、誰かやってくれる人いる？」
「はーい、委員長がやればいいと思いまーす」
　そう言ったのはお調子者の幸路知佳子である。基本的にこのクラスで〝委員長〟と呼ばれた場合は、千恵梨のみを差すのが一般的である。千恵梨は面食らったように一瞬硬直したが、すぐに知佳子に口軽な調子で呟くように答えた。
「なんであたしが……」
「で、そのお相手は乃木坂くんがいいと思いまーす！」
「ちょ、ちょっと、なにを」
　相変わらずの豪快さで笑う知佳子に、珍しく狼狽える千恵梨の耳朶がほんのりと淡い桃色に染まっていく。微笑ましげに眺める香草塔子と呆れ顔の武藤（むとう）　灯里（あかり）（女子十七

番）の背後で、佐倉小桃は小さく溜め息を零した。小桃はこっそりと乃木坂朔也を見やるが、後ろ姿ではその表情の確認もしようもない。

「知佳子、いい加減にしなよ、千恵梨が困ってる」

自他共に認める千恵梨の親友、田無（たなし）　紘那（ひろな）（女子九番）が見かねて知佳子を注意をすると、親友の声で我に返ったのか安堵したようにほっと息を吐いて千恵梨は肩を落とす。すぐに笑顔を取り繕って、普段のしっかりとした調子で口を開くのだった。

「まあ、あたしは学級委員だし、知佳子の提案も一理あるわよね。乃木坂くんさえ良かったら、あたしは――」

「いってーなっ、なにするんだよ白百合！」

と、大きく喚いて立ち上がったのは不良グループの面子の秋尾俶伸だった。唐突の反応に注目が俶伸に集まっていく。

「え、なあに？」

隣に座る美海が不思議そうに俶伸を見上げるのを、俶伸は顔を朱色に染め上げてじりじりと睨み付ける。無垢を装ったその大きな瞳の奥に、小悪魔のような無邪気さが見え隠れしているのを知っているからだ。

「なにじゃねえよ、お前な」

「どうした、秋尾？」

惣子朗が頭の上で疑問符を乱舞させながら不思議そうに訊ねる。言葉を遮られてしまった千恵梨はいささか不満顔であった。

話を振られた俶伸はもう一度美海を見やって、その爽快で涼しげな笑顔に言葉を失い、観念したように肩を落とした。

「あー、いや……勝平ってさ、俺らと仲いいだろ？　だから、俺……そこに入ってもいい、けど」

言いながら、俶伸の視線は美海とは別の人物をちらちらと落ち付きなく捕らえていた。もっともそれに気付いたのは極少数の限られた生徒だけだったが。

「あ、あの、私も」

次に声を上げたのは、普段は榎本留姫や朝比奈（あさひな）　深雪（みゆき）（女子一番）と三人で行動することの多い、都丸（とまる）　弥重（やえ）（女子十番）だった。クラスでは大人しくてあまり目立たないが、行事毎には割と積極的に参加する方で、普段から人が嫌がる役割を率先して引き受けてくれる等、心優しい女子生徒だ。目立たない故に、そう言ったことに気付いているのは極一部ではあったが。

控えめに笑いながら、やや聞き取りにくい小さな声で、ぽつりぽつりと言葉を零した。

「私たち、三人組だから、さっき留姫ちゃんが部屋決めで譲ってくれたし……あの、八木沼さんさえ良かったら、私がそこに入ろうかなって」

「ほんとー？　由絵は大歓迎だよー、仲良くしよーね！」

由絵がそう言って嬉しそうに頬を綻ばせながら、招き猫のように手を振る。班での行動が始まれば由絵はほとんどの時間を勝平と過ごすつもりでいるのだが、どうせなら、仲良しの美海や果帆が入ってくれればいいなと思っていた。だが都丸弥重は優しくて、たまに言葉を交わせば不思議な言い回しをしたり、意外と楽しい少女だと由絵は以前から好感を持っていたので、大歓迎、との言葉は自然と口から零れ落ちたのだった。

惣子朗が「よし、決まりだな」と微笑んで黒板に名前を書き記していく。被害を受けそうだった千恵梨もこうなれば特に異存はないようで、胸を撫で下ろしつつ、予め用意していたくじ引きの紙を持ち上げた。

「すんなりと決まって良かったわ、二人ともありがとね。それじゃあこれから、男子は男子、女子は女子でペアを作ってね。作ったらこの紙に二人分の名前を書いて、男子はこっち、女子はこっちの箱に入れることー。はい、始め！」

合図と同時に、いっそう賑やかにクラスメイトたちが各々と教室を移動する中で、俶伸は隣の席の美海を恨めしげに見詰めた。

「白百合〜」

「あら？　あたしは秋尾くんをちょっとだけ抓ってみただけなんだけどなー」

学年一の美少女と評判の笑顔でそう返されては、俶伸も観念する外ない。美海は楽し

げに声高らかに笑んで席を立った。
「果帆、紙取ってくるね」
「あいよー、よろしくー」

＊　＊　＊

Ａ班　秋尾・千景・都丸・八木沼
Ｂ班　新垣・本堂・白百合・間宮
Ｃ班　小田切・目黒・小日向・和歌野
Ｄ班　菫谷・関根・七瀬・深手
Ｅ班　金見・森下・羽村・武藤
Ｆ班　筒井・竜崎・香草・幸路
Ｇ班　如月・乃木坂・泉沢・田無
Ｈ班　有栖川・道明寺・佐倉・水鳥
Ｉ班　福地・御園・朝比奈・榎本
Ｊ班　高津・譲原・鈴茂・萠川

K班　桧山・与町・野上・渡辺

「さいあくー」

黒板に書き綴られた名字の羅列を見て、オレンジ色の唇を突き出しそう呟いたのは渡辺彩音だ。隣ではツインテールの野上雛子が同じく怪訝顔で溜め息を零している。クラスの女子の中で一番、今時で洒落ていると自称するグループに属する二人は、オタクコンビと呼ばれる桧山（ひやま）　洋祐（ようすけ）（男子十四番）と与町（よまち）　智治（ともはる）（男子二十一番）との組合せに不満が隠せない様子である。

「お前ら失礼すぎるだろ」

それを聞いていたライオンの鬣みたいに派手な髪型の高津政秀が、意地が悪そうににやけながら二人の顔を覗き込む。まるでご愁傷様、とでも言いたげである。傍らにはその政秀と同じ班になったスケベの譲原鷹之と、長身の萠川聖、ガーリーな鈴茂まなみの三人が寄り合っている。元々交友する機会の多かった不良グループとギャルグループが挙って同じ班になったのは、よりにもよってオタクと組まされた彩音や雛子から見たら羨ましい限りであった。どうやらこの両問題児グループとオタクコンビとの間には、深い溝があるようである。

しかし反対に、こんな意見も飛び交っているのだった。

「どうして私が、あんな野蛮な人たちと……」

クラスの女子で唯一眼鏡をかけている朝比奈（あさひな）　深雪（みゆき）（女子一番）は、げんなりした様子で眼鏡のテンプルの部分に指を添え、頭を抱えるような仕草をする。休憩時間はもっぱら保健室に入り浸っている彼女は、どちらかと言えば大人しくて目立たない部類の女子生徒で、交友関係は狭く、特に男子に対しては近寄り難い雰囲気を醸し出していた。そんな少女なので、不良グループの二人、御園英吉と福地旬と組まされたことが大いに不満な様子であった。一足先に班が決まっていた都丸弥重が、やんわりと彼女を宥めている。だが同じく保健室組で同じ班の榎本留姫は、大して興味もないのか文句の一つも口にせず、ポニーテールを頬の端に垂らしながら黙々と読書を始めていた。

その様子を近くで眺めていた道明寺晶と有栖川直斗の二人は呆れたように笑い、同じ班となった佐倉小桃と水鳥紗枝子にこっそりと耳打ちするような仕草で言う。

「俺らは仲良くしような、よろしく」

「ええ、こちらこそよろしくね。……水鳥さんも」

女子学級委員長の泉沢千恵梨が率いる、極々平均的なグループ――差し当たり女子の

主流派と言ったところ――に属する小桃は、今回は本来のグループのメンバーではなく、クラスではやや孤立気味の大人びた美女、水鳥紗枝子とペアを組んでいた。小桃の言葉に紗枝子が軽く微笑んで頷く。

晶や直斗と親しい真柄の乃木坂朔也は、小桃と同じように男子内でやや孤立している如月仁と組んでいた。小桃たちからは少し離れたところで、その二人と同じ班で行動することになった千恵梨と田無紘那と一緒に、穏やかな雰囲気で談笑している。

「乃木坂くんとなら心強いわ、一緒になれて嬉しい」

「ははは、こちらこそ、委員長とご一緒できるなんて光栄ですよ」

同じく学級委員長の筒井惣子朗は、同じ野球部所属の竜崎圭吾と共に、女子主流派のメンバーで一際賑やかなこの二人組、ムードメーカーの香草塔子と幸路知佳子と教卓の付近で輪を作り、シャープペンシルを握り締めながら旅行の資料に目を落としていた。

「筒井くんと竜崎くんなら、あたしらがなにやらかしても平気そうな気がするよ！」

「ねえー！」

「……ははは」

天然ボケとトラブルメーカー。先が思いやられた圭吾の乾いた笑い声に気付いた者

はいなかった。

　女子の中でも特に絵に描いたような優等生のこの二人組、武藤灯里と羽村　唯央（女子十三番）は、男子中間派の中でも比較的大人しめで無愛想な金見　雄大（男子四番）と、少女のように小柄な森下　太一（男子十九番）と同じ班になっていた。とは言え、クールな灯里と大人しい唯央と雄大なので、会話らしい会話は特に生まれなかった。それなりに人懐っこい太一も、空気を読んで沈黙せざるを得ないのだった。

「行き先はしっかり者の二人にまかせるね、よろしく」

「菫谷お前、少しは協力しろよ……」

　あまり上手く行っていなさそうな灯里と唯央を心配しつつ、七瀬　和華（女子十一番）もまた、今後が思いやられていた。大食いで有名な関根　春生（男子七番）はともかくとして、男子中間派に所属しているのが不思議なくらい生活態度の乱れた男、菫谷　昴（男子六番）と同じ班になってしまったからだ。不真面目でいい加減、あまつさえ協調性は皆無――容姿端麗と名高いのに勿体ないと思う。和華は深手　珠緒（女子十四番）と顔を見合わせつつ、張り付けたような愛想笑いを浮かべるのであった。

「サキ、どこ行きたい？」
「そうね、花菜が私のために決めてくれたところなら、どこでもいいわ」
　百合の花にでも囲まれていそうな、まるで別世界に迷い込んでしまったような感覚で、小田切（おだぎり）　冬司（とうじ）（男子三番）と目黒結翔の二人は、仲陸ましげに談笑する小日向花菜と和歌野岬を呆然と眺めていた。彼女たちは普段、白百合美海や間宮果帆、八木沼由絵と五人で行動することが多いのだが、中でもこの二人は異色な世界観を醸し出していた。男子用の制服ズボンを愛用する等、大柄で男勝りな花菜と、小柄で可憐な岬は〝宝塚コンビ〟との異名があり、ある意味このクラスの名物のような存在である。
　冬司と結翔が普段特に親しくしている運動部所属の他二人も、色々な意味で騒がしい女子二名と組まされたことを思えば、ある意味、一番の貧乏くじを引いたのは自分ら体育会系グループなのではないかと、彼らもまた、不安に駆られるのであった。

「お前と同じ班になるとはねえ、荷物持ちはまかせたわ！」
「ちょ、無茶言うなよー、間宮の方が俺より力ありそうじゃん！」
「あははは、本堂くんそれ失礼すぎー」
「俺の荷物も頼むわ。白百合のは俺が持ってやるからな」
「なんで夏季のまで俺が持つんだよ！」

多分、誰が見ても一番楽しそうにまとまっているのはこの班であった。本堂空太と間宮果帆を中心として愉快な雰囲気が広がり溢れている。明るくて可愛いと名高い美海と、綺麗で格好良いと名高い果帆と同じ班ともなれば、男として悪い気はしないと言うものである。新垣夏季はだらりと鼻の下を落とし、終始にやけ面を隠せないほどに浮かれるのであった。

「沖縄旅行、楽しみだな～」

秋尾俶伸と千景勝平に微笑みかけながら、八木沼由絵はそう呟いた。

２０１３／１０／０６　ＰＭ１４：２４～

００３・『天井の金魚』

――不思議だろ？　お前と話してると、ささくれ立ったところがぽろぽろ剥がれるみたいにさ、安らかな気持ちになるよ。

そんな風に言って貰えたのは、いつのことだったか。

胸に手を当てる。とくんとくんと音がする。

この世の果てに存在してるみたいに、空間自体が隔離されしまったかのように清閑な放課後の教室。窓際の、後ろから二番目の席。和やかな表情でうなだれる横顔。彼曰くたまたま残ることもある、と言う程度で、この時間にいるのはむしろ珍しい方なのだと笑うのだが――それでも偶然の巡り合わせか、彼女にとっては、いつも彼はそこにいるのだ。

シーリングライトの光が反射する放課後の教室へ、七瀬（ななせ）　和華（のどか）（女子十一番）はそっと足を踏み入れた。時刻は午後七時を廻っている。部活動で授業後も校内に残っていた生徒たちもとっくに帰宅していると言うのに、踏み込んだ室内には一人、先客がいる。

短めに切り揃えられた黒髪とそこから続く長いうなじ、野球で鍛えられた逞しい肩が脱力したように、机の上にその身を預けていた。

授業が終わり、いつものように下校途中に立ち寄ったスーパーで買い物を済ませ、帰宅して夕飯の支度をし、妹たちに食べさせる。家庭内での和華の夕食の仕事は料理までだった。その後は妹たちに食器洗いを任せ、自分は妹たちが取り込んでいた洗濯物を一枚一枚畳み、整理していく。小学生の時に母が病気で亡くなってから、今ではすっかり慣れてしまった和華の日常。

家事を一通り終えると、自室で本を読むのが和華の日課だった。これまでに沢山の本を愛読した。恋愛物、推理物、純文学、哲学。本のなにが楽しいのかとあまり読書をしない人には聞かれることもあるが、和華にとっては明白な答えがいつもそこにあった。本とは和華にとって、人々の想いの集合体だった。物語に登場する人物、そして彼らを作り出した著者、それぞれがなにを考えなにを経て、なにに至るのか。彼らの人生の重要場面に出くわした和華は、彼らと同調し、深く深く理解を示そうとする。架空人物だからなんだと言うのだろう。だって、彼らは紙上に描かれた活字の中で、間違いなく生きているのだ。だから和華は、本が好きだった。

その日は体育の授業があった。夏の残暑も過ぎ去り、すっかり肌寒くなった十月の中

旬、和華はうっかり体操着を教室に忘れてしまったのだった。家庭事情の影響か、しっかりしていると言われる和華だが、普段気を引き締めている反動からたまにこうして物忘れをしてしまうことがあった。もっともそれで人の迷惑になったことは、少なくとも和華の認識の範囲内にはこれまでなかったのだけれども。気付いたのは夕食を済ませ、真新しい洗濯物を脱衣所に出しに行こうとした時である。時刻は午後六時半を廻っていた。和華は少し考えてから、父親が帰宅するまでにまだ時間があることを確認して、家を出た。

職員室で先生に事情を説明し断りを入れる。和華は闇の深い階段を前に薄気味悪さを覚え、急ぎ足で駆け上がり、三年B組の教室を目指す。そして、仄かな灯りの漏れる扉を前に息を飲んだ。緩慢な手付きで、物音を立てぬように戸を引く。まさかとは思ったが、それでも、心のどこかでは期待もあったのだ――けれど、記憶と同じ場所にその人がいることが、不思議で仕方がなかった。

静まり返った教室、窓際の後ろから二番目の席で、筒井（つつい）　惣子朗（そうしろう）（男子十番）が幼気な素顔を見せて眠っている。普段から穏やかで温厚な人柄の惣子朗であっても、こんなにも子供のようなあどけなさは感じたことがない。和華はゆっくりと歩み寄り、すやすやと眠る惣子朗を暫し見詰める。こんな時間まで、なにをしていたのだろう？

机に突っ伏した惣子朗の手元を見やる。三泊四日・沖縄の旅――その文字を認めて、

和華は胸の奥からなにか温かいものがこみ上げて来るのを感じた。――こんな時間まで、たった一人で、これを仕上げていたと言うの？

　和華は惣子朗の肩に添えるように手を置き、呼び掛ける。疲れて眠る惣子朗の目覚めを、少しでも気持ち良いものにしたくて、できるだけ優しく、優しく。

「筒井くん、起きて」

　くすぐったそうに少しだけ身体が揺れる。そして惣子朗はすぐに瞼を開けた。

「……七瀬か？」

　和華の姿を認めた惣子朗が、少しだけ目線を逸らして壁に取り付けられた時計を見やる。現在の時刻を確認すると、身体を起こして和華を不思議そうに眺めた。

「お前、こんな時間になんでいるんだ？」

「それは私のセリフよ？　筒井くんこそ、こんなに遅くまで」

　和華は惣子朗の手元を見やる。

「……ずっとそれを作っていたの？」

　惣子朗が手元のそれに視線を落として、少し微笑む。

「ああ、あと一週間しかないからな。最後にきちんと修正しておきたかったんだ」

　言いながら、やや散らばった資料をその手に纏めていく。

「でももう終わりだ。みんな喜ぶかな？」

資料を片手に微笑む姿はどこか清々しく、和華も自然と穏やかな気持ちが強くなっていく。本当にこの人は――例えるなら、青空のような人だ。大きくて、広くて、高くて、綺麗で。和華は青空が好きだ。晴れやかな気持ちになって心が洗われるから。

「七瀬はどうしたんだ？」

惣子朗はそう言って和華を見つめる。まだ少しだけ、ぼんやりとした瞳で。

「体操着を忘れたの。洗濯物、まだ回していなかったから、その前にと思って」

「そうか」

和華の家庭の事情のことは多分、惣子朗はクラスの中では誰よりも知っていた。以前和華の口から、直接話したことがあったからだ。変な気を使わせてしまったかしら――と、和華は少しだけ顔色を窺ってしまう。そんな和華に気付いたのか、惣子朗は旅行の資料と鞄を手に持つと、優しく微笑んで言った。

「帰ろうか、送っていくよ」

帰り際に職員室に立ち寄って、帰宅することを告げる。

すっかり暮れてしまった夜道を和華と惣子朗は、普段はそうすることがないのに、とてもとても自然に、自然に肩を並べて歩く。とくん、とくんと、少しだけ響く鼓動がなんだか少しくすぐったい。隣を意識する。平均よりもやや高い和華の頭が惣子朗の首

筋辺りにあることを知って、ああ、男の子なんだなと、妙に関心してしまう。
「天井の金魚の話、覚えてるか？」
　他愛もない会話の途中で、唐突に惣子朗がそう問い掛けてくる。安らかな気持ちになるよ――と、あの日の時間を思い出す。彼との話を、忘れるわけもない。
「覚えているわ。江戸時代の大阪で、繁栄を極めていた豪商が、天井を水槽にして下から金魚を眺めていたって話ね」
「ああ、それ。俺さ、あれから少し考えたんだよ」
　歩みを進めながら、惣子郎は少し腰を屈めるようにして和華の顔を覗き込んだ。一瞬だけ胸が大きく高鳴ってしまったのは、内緒だ。
「七瀬はどう思う？」
「どう思う、って？」
「金持ちだかなんだか知らないが、なんだって天井に金魚を飼ってみようだなんて思ったんだろうな。七瀬はさ、その豪商は、天井で泳ぐ金魚を見て、なにを考えたと思う？」
　難しい質問だった。惣子朗の話を聞いて、興味を持った和華は〝天井の金魚〟に関する本を探してみた。けれど見つけられなかった。惣子朗の疑問はそのまんま和華の疑問でもある。ゆらゆら、ひらひら。下から見上げたその先の水槽で各々と揺らめく金魚の群れ。きらきら、きらきら。けれど、もっとよく確かめたいと、よく見て触れて感じ

たいと願ってもきっと叶わないのだ。だって天井だから。
「わからないわ。でも、私もそれが知りたい。筒井くんは？　筒井くんは、どう思うの？」
「俺もわかんねー。でも」
星が瞬いていた。惣子朗は星空を仰いで手を伸ばす。
「これと一緒だ。どれだけ手を伸ばしても、届かない、頭の上だから、多分、すげえ遠くに感じるんだよな」
きっと――と、惣子朗は立ち止まった。釣られて和華も足を止める。
空を仰ぐ惣子朗の表情は自分に向いていない。だから彼がどんな顔をしているのか、和華にはわからない。心臓をキュッと抓られたような、痺れるような切なさで胸が震えた。わからないことが切なかった。
「卒業まで半年もないだろ？　七瀬、俺にはさ」
和華も空を見上げる。ああ、夜空なんて久々にまじまじと見たけれど、オリオン座がこんなにも瞬いている。
「天井を泳ぐ金魚が、クラスのみんなに思えてならないんだ」
当たり前みたいに巡り会って当たり前みたいに時を過ごして、当たり前に笑い合って当たり前にそばにいた。同じ目線にあるのが当たり前だったはずの水槽と金魚の群れ

が、天を泳ぐと。
「泳ぐ場所が変わっただけなのに、途端に手の届かない物のように感じる」
そう言うものだろ、でもそれって、悲しいことなんかじゃなくて、きっと凄いことなんだよな、だからきっと宝物なんだ、今の時間がとても大切なんだ――。
「送ってくれてありがとう」
玄関の前で振り返って、涼やかに笑い掛ける。
「どういたしまして」
惣子朗も笑って、少し照れたように頭を引っ掻いた。
「七瀬、あのさ」
おもむろに通学用バックを探って惣子朗が一冊の本を取り出すと、和華に差し出した。不思議に思いつつ和華はそれを受け取ると、表紙を眺めてみる。ブックカバーで保護されていて、本のタイトルはわからない。
「これって?」
「本、好きなんだろ?　今、読みかけてる途中なんだ。続きは楽しみにしてるから、……卒業したら、返してほしい」
はにかむように、惣子朗は笑った。

「高等部でも、同じクラスになれたらいいな」

また明日――そう言い残して、惣子朗は和華から遠ざかっていく。どんどんどんどん、視界の彼方に過ぎて行く。

和華は溶けるように熱く、締め付けられる胸をそっと押さえた。息苦しくて、もやもやする。天井をガラス張りにして金魚を飼ったと言う豪商、天井には手が届かないと言った彼。――今だってそうだ、小さくなる惣子朗の背中に、手が届かない。届かない。

わからない、彼に対するこの感情が、なにかなんて。

＊　＊　＊

パン、パン、と鉄板を張り巡らせた教室に乾いた音が響き渡る。

次の瞬間に奏でられるのはソプラノのコーラス。そして、真っ赤な絵の具が天井に向かって鮮やかな色彩を描く。天井の金魚の話を思い出した。絵の具が勢い良く飛び散って行く光景は、和華にはまるで金魚が泳いでいるみたい見えた。ゆらゆら、ひらひら、きらきら、と泳いで、そして、地上に落ちて行った。水槽が割れて金魚が床に投げ出されたのだと思った。

金魚の群れが空中を泳いで、泳いで、床に寝転んだ惣子朗の上へ落下して行く。ああ、そうだ――天井に金魚を描いたのは、あなただったんだ。水槽は、あなただ。

和華は割れた水槽に手を伸ばす。いつも届きそうで届かなかった天井の金魚に、触れたいと思った。ああ、でも、何故――同じ目線にいるのに、こんなにも遠いのだろう。

私にとってあなたは、天井を泳ぐ金魚だった。本当はずっと恋い焦がれていたの。触りたかった、確かめたかった。あなたにとってはどうだったのだろう。ああ、こんなことなら好きだと言ってしまえば良かった。今ならまだ間に合うだろうか。そして私は手を握って、あなたを地上に、連れて降りるの。

【残り…４４名】